

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	和田 琢磨
論文題目	『太平記』生成と表現世界
審査要旨	
<p>本論文は、『太平記』の成立当初の作品としてのありようを問い、増補され変質していく過程を論じ、更に江戸期における受容の実態を解明しようとした、広い視野を持つ論文である。全体は、現実の歴史的状況と作品の内実との乖離に焦点を当てた第一部「生成と歴史叙述」、いったん成立した作品世界にどのような改作の手が加えられ、江戸期に享受されるに至ったかを追った第二部「多様化する表現世界—中世から近世へ—」の二部からなる。</p> <p>第一部の第一章「初期足利政権と『太平記』の生成」は、まず、作品成立当初の実情を伝える今川了俊著『難太平記』の記述を、従来の研究に批判を加えながら丹念に読み解き、足利政権が記事の書き換えを求めるまでに関与していた実情を踏まえつつ、了俊が作者と考えていたのは恵鎮であったろうとする。諸説ある作者説を逐一検討しながら慎重に導かれた結論は、それなりに説得力がある。続いて、同時代作品たる『明德記』を取りあげ、足利将軍を称賛する志向性を持つ点、初期形態の『太平記』も同じであったろうが、現存『太平記』ではそれが貫徹されていないとして、作品の変貌を指摘する。時代の推移と同時進行的に書き継がれていった作品の変質を見通した論で、特に『明德記』が末尾に相国寺供養記事を配したことと、初期『太平記』が天龍寺供養記事で終えていたであろうことと、共通の意味を見出している点は、従来、看過されてきたものであった。『太平記』の問題を考える一助として、『明德記』作者による自作改訂過程を分析した論も、示唆的な価値があろう。</p> <p>第二章「相反する将軍像—尊氏像と義詮像—」は、初代将軍尊氏と二代将軍義詮との描き方に落差があることを、尊氏の敵対者たる新田義貞の造型意図や、秩序形成のための天皇の存在の不可欠性を意識している表現等を絡めて論じたもので、本論文の独自性が最も明瞭に打ち出されている部分と言えよう。義貞を実像以上に拡大増幅している意図は、後醍醐天皇と尊氏との直接対峙の構図を避けるためであったとする点や、義詮の人格的欠陥が描き込まれているところに、『太平記』が成立当初とは異なり、もはや政権とは縁遠い関係で書き継がれていたであろう事実を想定、作者が望んでいたのは、足利将軍家より武家体制秩序の維持であったとする点など、新見解が随所に見られる。ただし、将軍という体制側の人物に焦点を絞っての論ゆえに、後醍醐天皇や楠正成といった相対する側の人物解析が弱く、それを補った総体としての作品論が今後に望まれる。</p> <p>第三章「歴史叙述の方法—時代状況との関わりから—」は、歴史的現実と表現との関係を論じ、まず、鎌倉幕府の討幕叙述では、公家が武家を倒すという視座から、源氏(足利)が平氏(北条)を倒すという視座へ転移していると指摘、合戦叙述に関しては糧食にまつわる記述を通して楠正成の智謀ぶりを描いているとし、一人物をめぐる本文改訂には当時の政治的緊張関係がそのまま反映されていると見る。また、現テキストの末尾が新管領の細川頼之就任記事で唐突に閉じられているのは、頼之を賛美したものではなく、一つの社会システムが完成したことに意義を認めて筆をおいた結果であると説き、儒教的徳治思想を掲げる作品冒頭の序は、理想に相反する乱世を映し出す鏡としての機能を有しているとする。中でも、作者の巧みな視座の転移によって全体の流れが形づくられているという指摘と、作品末尾の蔵している意味を新たに読み解いた点は、高く評価できよう。</p> <p>第二部の第一章「巻二十一「塩冶判官讒死事」の変相」は、諸本間で本文異同が顕著で、近世に至ると人気を博することになる、高師直によって不幸な死に追いやられた塩冶判官の話について、諸本の記事分類から検討しなおし、本文展開に関する新たな提言を行い、かつ、近世における享受の実態にまで論及している。この塩冶判官の話は、現実の政治・社会と強く結びついている『太平記』の表現世界から遊離して、独自に一人歩きを始めていたのであり、その過程を考証しようとした諸本の本文分析は緻密である。</p>	

第二章「『太平記』を纏う物語—近世初期『太平記』享受の一齣」は、『太平記』の名を冠した作品が近世に輩出する現象に注目、その中から『獣太平記』『魚太平記』『草木太平記』『諸虫太平記』『貧人太平記』の五作品を取りあげて論じたもの。『太平記』の名を用いた理由は各作品まちまちで、合戦場面があったりなかったり、塩冶判官話を利用していたり、大乱の顛末を語っていることの象徴的意味であったり、末尾を似せて最後を唐突に結んでいたりと、多様であるとする。従来、近世文学研究者が行ってきた作品研究に、『太平記』を専門とする側が参加することになった意義は大きい。近世における『太平記』享受は、すそ野が広い。更なる研究の伸展が期待される。

以上、本論文は新見を多く含んでおり、博士(文学)の学位を授与するに値するものと考えます。

公開審査会開催日	2013年 3月 28日		
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	氏名
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・前教授	博士(文学)早稲田大学	日下 力
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	博士(文学)早稲田大学	竹本 幹夫
審査委員	早稲田大学教育・総合科学学術院・教授	博士(文学)早稲田大学	大津 雄一